

「アングロ・サクソン年代記」の年号のずれについて

小林 絢子

(平成 14 年 10 月 3 日受理)

Some Discrepancies of the Annual Numbers in “the Anglo-Saxon Chronicle”

KOBAYASHI, Ayako

(Received on October 3, 2002)

キーワード：アングロ・サクソン年代記，年号，写本，アルフレッド大王

Key words: The Anglo-Saxon Chronicle, annual numbers, manuscripts, Alfred the Great

1. 0

ビードのラテン語の歴史書“Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum”をアルフレッド大王(d. 899)が古英語訳させ、英国中部や北方の民間の古い記録などを付け加えて、編年体に編集し直したものが「アングロ・サクソン年代記」であると言われている。アルフレッド大王の死後もその年代記は書き継がれ、ピタバラ修道院で書かれたものは1154年までの記録を残している¹⁾。しかしこの間アングロ・サクソン王朝はノルマン人による征服を経験し、国家の激動期であったのであり、ピタバラ以外でもこの年代記は様々な転写の過程を経ることになった。それらはいくつかの系譜に分かれるが、その成立事情は複雑である。

「アングロ・サクソン年代記」の現存の写本がカバーしている年代は大体紀元前60年から上述の時期までであるが、それぞれの写本により少しずつ異なっている。まず、パーカー写本(A写本: Corpus Christi College, Cambridge MS 173)はCedric王家の系譜を別にすれば紀元前60年から1070年までの出来事を記している。B写本(Cotton Tiberius A vi)とアビンドン写本(C写本: Cotton Tiberius A i)はA写本と同じ時から記述が始まっているが、前者は977年、後者は1066年、ノルマン征服までを扱っている。ウスター写本(D写本: Cotton Tiberius B iv), ロード写本(E写本: Laud Misc. 636), ドミティアン写本(F写本: Domitian A

vi)も始まりは皆シーザーの侵攻の記述からであるが、終わりはそれぞれ1080年, 1154年, 1058年である。しかも各年代記の始めと終わりの部分は何年も記述が省略されていたり、取り違えがあったりする。また初期の頃、800年代までは記述が抜けている年代も多い。その上 Mercian Registerという中部地方の記録が混入されていたり(B, C, D写本), オロソウスの世界史が付加されていたり(C写本), 金言やラテン語文が付随していたりする。その他断片と呼ばれるH写本(Cotton Domitian A iv)やI写本(Cotton Caligula A xx)がある。この2つは「アングロ・サクソン年代記」の範疇にいれてよいか疑問である。各写本のどの部分がどの写本から書き写されたか、またどんな副次的資料が参照されたかなどという写本間関係の議論はJ. イングラム, B. ソープ, J. アール, C. プラマーの研究をはじめとして近年刊行中のブルワー社の同年代記の各写本のシリーズに詳しい。(Collaborative Editions: *The Anglo-Saxon Chronicle* MS A, J.M. ベイトリー編1986年; 同MS B, S. テイラー編1983年; 同MS C, P.W. コナー編1996年; 同MS D, G.P. カビン編1996年; 同MS F, D. ダンヴィル編1995年; D.S. ブルワー社刊行)²⁾。拙著(共同研究)「東京家政大学研究紀要(人文科学)」第40集(2000年2月)所載の *Studies towards a 'Variorum Anglo-Saxon Chronicle'* にも概説してある。

1. 1

このように年代記という形をとりながらも、付加削除その他の改変によって複雑な製作過程を経ている「ア

「アングロ・サクソン年代記」であるが、その英訳である *The Anglo-Saxon Chronicle* の *chronicle* という単語はどのような意味を持つものだろうか。Chronicle は *chronic* からきていて、ラテン語の *chronicus* やギリシャ語の *khronikos* は 'of time' の意味である。そのタイムとはラテン語の *annus* 'year' つまり「1年」というタイムを指す。従ってその派生語である *annals* は 'year book' となり、これは *chronicle* の別名でもある。事実「アングロ・サクソン年代記」の各写本を指す時は *the annal* と呼ばれることが多い。その書物は即ち「1年毎の記録」というわけであるが、「1年」の決め方が難しかった。

年代記を作成する場合、或いはある時期の歴史を年代順に編集する場合、現代の常識では西暦何年の1月1日から12月31日までを1年として配列する。しかし古い年代記の場合はそうとは限らない。古英語では「その年」という時は *gear* を使っていたが、1年という期間を数えるのには主に *winter* を使っていた。そのようにクリスマスを経点として1年を数える数え方の他に3月25日、9月1日、9月24日などから起算する数え方もあった。「アングロ・サクソン年代記」では年の初めはクリスマスとイースターの2つの起点があったとブラマーはいつている³⁾。しかしアールによると時々9月24日(土地の査定更正布告の日)も起点となったことがあるという⁴⁾。しかも写本または時期によってどの方式を採用したのかは断っていないから、年代記の年代の確定はややこしいことになる。

アールによると⁵⁾「アングロ・サクソン年代記」の中で初めてクリスマス起点とはっきりわかる記述が始まるのは794年(A写本)の項という。この年(の12月25日)にハドリアヌス帝が亡くなったことからはじまって翌年(の12月17日)にエグフェルス王の死までを1年として扱っている。しかしD写本とE写本の780年、792年、797年の記述は同じ頃の内容を扱っているのに9月起点で区切っている⁶⁾から複雑である。800年代に入ってから840年から890年まではどの写本も9月起点が主流となっている⁷⁾。何月起点になっているかということを見出すには、例えば3月におきた戦いを *late on geare* 'late in the year' と表現していて、それより約半年前の出来事をその年内に起きたこととして記述していれば9月起点となる。クリスマス起点では3月の戦いを *late in the year* とは表現できない。しかし879年、

880年、882年から887年まで、890年の記述では9月からクリスマスまでに起きた戦いはそれぞれ1年後に繰り入れられているという⁸⁾。このように1年の区切り方には問題がある。その区切り方が写本間で違っていたら、集大成する作業は大変なことになる。しかし実際には、少なくともこの年代記の前半には、各写本の間で年代的にそんなに多くのずれはない。890年までの記述はA, B, C, D, E写本の間で一致している場合が多い。カビンの研究によると890年までの記述のうち102年分は全く一致している。紀元後100年までには22年分、100年代には2年分、200年代から500年代はD写本が欠けているせいか全一致はなくて、600年代は1年分、700年代には25年分、800年代には52年分が一致している⁹⁾。年代記の編纂がアルフレッド大王の時代であるので、その時代に近づくにつれて転写作業も正確になっていったのではないかと思われる。

しかし、大王の没後、900年代には記述は年代的に混乱してくる。例えば *Tettenhall* の戦いという重要な対デーデン戦の事をD写本は、2年にわたった戦いではないのに、909年と910年の両方にそれぞれ少し違った形ではあるが重ねて記述してある¹⁰⁾。この問題は先に述べた、年代記の年代の測り方にもよると思われる。特にエドワード長兄王の時代(d. 924)は年代的に前後している事が多く、9月起点からクリスマス起点に移行していく様子がかがわれる。1000年代となると1006年はD写本の記述が詳しいが、それはクリスマス後の出来事まで入れて書いているので¹¹⁾、クリスマス起点ではなくて、1月起点であると推測される。だんだん現代の数え方に近くなっていくが、大部分の写本は前述のように1000年代初期に記述を終えているのである。

2.0

現代の考え方からすると「年代記」が数冊あったとすると年代とその年の出来事の記述はそれらの本の間で一致しているべきであるといえるが、昔の記録はそうなのではない。それらを全て調整して、というより、その年号にふさわしい事実を調べて同じ内容の記述とを同じ年号のもとにそろえるのが「アングロ・サクソン年代記」という1つの本を編集する校訂者の役割であろう。事実現代英語版ではそのように配慮されている。しかし前述のように同年代記は単発のものではなく、同じ材料を扱った写本の集合体なのである。そこで本文研究としては年代と原本の記述のずれは、その中で最も信頼のおける写

本を中心に事実と照合され、相異を指摘されて正される試みがなされねばならないということになる。

断片を除いた6写本のうち最も信頼度の高い写本はふつうA写本とE写本といわれる。ブラマーとアールも主にこの2写本を校訂している。E写本はA写本が1070年に記述を終えたあとの124年分が何期かに分けてピタバで書き写され、書き継がれたものなので、年代記の前半はA写本、後半はE写本をみていくのが適当であろう。

2.1

年号のずれの原因としては1.1で述べた起点の問題を別としても、書き写した者(写字生)達の写し違いがまずあげられる。年号はローマ数字で書かれているので1(50)とiを間違えたり、c(100)やx(10)のどちら側にxやiを書くかによって年号が全く違ってくる。一回間違えたと順次狂ってきて、訂正されるきっかけがくるまでそのままということもある。写字生が交替して前任者の間違いに気づいて直してもその前の部分がすでに他の写字生によって写されていけば間違いがそのまま他写本で受け継がれていくこともあり得る。写字生によっては間違いに気づいて年号を訂正するが、その訂正の仕方も史実と照合して合理的に直すというのではなく、年号を2重に書いて辻褄をあわせたり、飛ばして書いて数を合わせたりすることもあり得る。iやvはminim文字なので、消されたり書き足されて読みづらくなっていることが多く、何人の手で訂正されたのかわかりにくいこともある。

A写本の最新の校訂者であるJ. M. ベイトリーはこれらの原因によるA写本の年号のずれを網羅的に指摘している¹²⁾。ベイトリーによると写字生による大きな変更はA写本については例えば次のような箇所で行われている。

- 1 主たる写字生が468年というエントリーを足したこと。この写字生は他の写字生が間違えて記した391年から399年(An. cccxci-cccxcviii)¹³⁾までの年号を491年から499年と直しているし、317年(An. cccxvii)という間違いも347年と訂正している。
- 2 他の写字生達が行った変更は、260年(An. cclx)の項が欠けていたのを261年即ちcclxiのiを削除して260年にしてとり入れ、その下に261年(cclxi)を足したこと、それから、892年、913年、914年、915年を2重に書いてしまったこと(これは後年訂正された)があげ

られる。

- 3 写字生達が見逃した間違いとしては、290年をAn. cclxcと書いてしまっていること、330年から339年までの年号が落ちていること。

このような細かい点はA写本そのものを仔細にみれば判明するが、ベイトリーはさらにA写本と他のB, C, D, Eの写本の間年号のずれを詳細に指摘している¹⁴⁾。その主張と2000年1月に発行されたThe Anglo-Saxon Chronicle MS Reading Groupによる*A Printed Trial Version of the Parallel Texts of the Anglo-Saxon Chronicle*¹⁵⁾の年代を照らし合わせて図表化すると次のようになる。

写本名	A	B	C	D	E
年号	46(47)*	47	47	47	47
	84(87)	85	85	87	87
	90(99)	100	100	100	100
	92(101)	102	102	101	101
	457	456	456	—	456
	642	641**	641	—	641
	643	642**	642	—	641
	644-***	643-	643-	—	643-
	650	649	649	—	649
	728	726	726	726	726
	741	740	740	740	740
	759	758	759	759	759
	773	774	774	774	774
	845	847	847	847	847
	891	892	892	892	—
	892	893	893	893	893
	914	915	915	915	915
	933	934	934	934	934
	958	959	959	959	959
	971	972	972	970	970

* ()内は後の写字生による訂正。

** BとCの641年と642年の記述はAの642年と643年のものと部分的に重なり合うが、Aの一部はBやCに移動している。Eの641年の記述はA, B, Cをとり入れ、更に詳しくしたもの。

*** 644年から650年まではAの記述は他写本より1年多くなっている。

このような年代のずれや内容の異動は古い記録を書き写したり、書き加えたりする時にありがちの事である。前任者の写本を写す際に他の断片的な資料を参照するこ

ともあったであろう。上述の年号に起きた事件を記す箇条書きの暦や歴史書は数少ないながらも既に存在していた。アルフレッド大王が前述のようにビードの本を元にしてこの年代記の編纂を命じた800年代後半までに、アッサー師が写しとっていた「ネオ聖人(St. Neot)の年代記」は写字生達の間でよく読まれていたという¹⁶⁾。その後になると“Northern Recention”という記録やMercian Registerも参照されたり、引用されたりしたらしい。写字生達が独自の考えで加筆訂正することがありえたので、彼らの筆跡の特徴、筆圧の差、インクの色の違い、消し方の違い等を研究してオリジナルな写本の姿を洗い出し、年代を確定するのが校訂者の仕事であった。

3. 1

B.ソープによる「アングロ・サクソン年代記」の並行校訂本(*Rerum Britannicarum Medii Aevi Scriptores: Rolls Series 23 Vol.1, 1857, Kraus Reprint 1964*)は同書の並行記述を最初に行った試みであった。彼は原写本と同じくローマ数字で年号を記している。

この年号と最新の校訂本、即ち1.0で掲げたブルワース社刊の「アングロ・サクソン年代記」の各写本別のシリーズで採用しているアラビア数字の年号をA写本を代表例として比較してみる。年号の一致していない箇所は最新版の校訂者(この場合はベイトリー)がソープ以後の研究成果を取り入れて改訂したと思われる。各項目の年号はベイトリーによる。

26年 Her onfeng Pilatus gyminge ofer Iudeas.

ソープ版では27年に入れているが、Aの写本ではここにカレット印があり、ソープは史実と照らし合わせて27年に入れたのであろう。ベイトリー版では写本のまま26年に入れている。

44年-46年 ソープ版では45年-47年にずれている。

他写本の記述にあわせた年号となっている。ベイトリー版では写本通りの年号を書き、後の写字生による訂正は註として別掲する方針なので、このようなずれが生じている。ベイトリー版には47年の記述はない。

83年 Her D'o'mittianus Tites broþur feng to rice.

この文はベイトリー版では84年であり、上記と同じ理由による。ベイトリー版の84年の記述は後の写字生によって87年と書き換えられていて、ソープは後者の年号を採用している。

90年 ソープ版では無記述。年号の文字が読みにくかっ

たせいかな年号自体が欠落している。

92年 ソープ版では無記述。年号の字が読めない箇所ではあるが、紫外線照射で読めたとベイトリーは注記している¹⁷⁾。

155年 ベイトリー版では後の写字生による記述と注記してここに Her Marcus Antonius 7 Aurelius his broðer fengon to rice. とある。

595年 Her Gregorius papa sende to Brytene Augustinum mid wel manegum munecum þe Godes word Engla ðeoda godspelledon.

ソープでは596年となっている。ベイトリー版では(綴り字の異同はあるが)同じ記述が596年にくり返されている。

897年 後の写字生の手で i が書き加えられ、ソープはその訂正の方を採用して、898年の項目に入れている。年号がこの頃から欄外に書かれているのでそれを参照している。このような1年のずれがベイトリーの900年(ソープは901年)から913年まで続く。

942年 この年に入っている詩はソープ版では941年に入っている。後の写字生が i を消したからだという¹⁸⁾。

971年 Her forþferde Eadmund æþeling. 7 his lic liþ æt Rumesige.

年号の記述がない所である故かソープ版では無記述。

ソープ版のA写本は記述の終わりまでをベイトリー版と比べると以上のような差異があることがわかる。(ベイトリー版は1070年までの項目があり、その後ラテン語で1076年と1093年の記述が続く。)

3. 2

ベイトリー(=B)とソープ(=T)の原写本に対する校訂の姿勢を比較して、まとめてみると、

- 1 後世の写字生の訂正した年号を取り入れるか否か。Bは取り入れない。Tは史実と合っていれば取り入れるが合っていなければ取り入れない。
- 2 後の科学技術(紫外線照射等)による成果をBは取り入れることが出来た。
- 3 ほぼ同じ内容の記述が繰り返される場合、Bは忠実に再現するがTは繰り返さない。これは並行本という制限のせいであろう。
- 4 年号が無記述である場合の取り扱いに差がある。

という点が指摘できる。1000年以上前の記録の年代的

正確さの問題はこのように複雑であるが、写本に様々な人の手加えられて、それを校訂者が精密に解きほぐし、真の写本の姿を再現しようとしている有様がまざまざと観察される。本文校訂の面白さが年号のずれからもうかがわれるということがわかる。

註

- 1) 寺澤芳雄他編「英語史総合年表」, 研究社, 東京, 1993年, p.23とp.44.
- 2) このシリーズは編集主幹 David DumvilleとSimon Keynesによる *The Anglo-Saxon Chronicle: A Collaborative Edition* (1983~) というタイトルで出版されつつあり、「現存する7つの写本すべてにわたる半校訂転写テキスト(semi-diplomatic texts)を中心に構成され、完成すれば全23巻におよぶ Anglo-Saxon Chronicleの原写本テキストならびにそれに関する史料研究の現時点における集大成となるものである。」池上忠弘他監修「シリーズ中世英文学シンポジウム」第6巻「'ピタバラ年代記'の言語」, 学書房, 1993年 pp.2-3.
- 3) Plummer, Charles and John Earle eds. *Two of the Saxon Chronicles: Parallel, Vol. 2*, "On the Comment of the Year in the Saxon Chronicles," p.cxxxix.
- 4) Plummer, p.cxxxix.
- 5) Plummer, p.cxl.
- 6) Plummer, p.cxl.
- 7) Plummer, p.cxli.
- 8) プラマーはChristmasはノルマン征服(1066年)以前はゲルマン風に mid-winterと呼ばれていたということとそれ以後も主にピタバラで書かれたE写本に多い表現であると指摘している。Plummer, p.ccxli.
- 9) Cubbin, G.P. ed., *The Anglo-Saxon Chronicle*, vol. 6, MS D, D.S. Brewer, Cambridge, 1996, p.xvii.
- 10) Cubbin, p.cxxii.
- 11) Plummer, p.cxlil-a 及びCubbin (D写本), pp. 52-52.
- 12) ベイトリーによるA写本の年号のずれについては, Bately, Janet M., ed. *The Anglo-Saxon Chronicle*, vol.3, MS A, D.S. Brewer, Cambridge, 1986, pp.xcvi.
- 13) 399年はcccxcviiiであり, cccxcviiとは書かれていない。 *The Anglo-Saxon Chronicle*では全体として, 4をivでなくiiiiと書いている。
- 14) Bately, p.cxvii.
- 15) 編集代表は筆者。2000年1月。
- 16) Bately, p.c.
- 17) Bately, p.6.
- 18) Bately, p.73.

Summary

After a brief survey of the discrepancies of the annual number in five extant manuscripts of the *Anglo-Saxon Chronicle*, the writer goes on to discuss difference between Thorpe and Bately in the treatment of the annual numbers when they made texts out of each manuscript. Their difference arises mainly from their attitude toward the manuscript, whether one is faithful to the manuscript no matter how wrong the original scribes were or to the fact which actually took place in that year. To observe a difference in the treatment of details in the texts is meaningful, and this time, it was surveyed through their difference in handling annual numbers in the *Chronicle*.